

第2回 文化資源を活用した文化観光の推進による地方創生に関する懇談会 議事概要

1 日時：令和6年9月11日（水）16時30～18時30分

2 場所：文化庁京都庁舎 本館東京リエゾン室 ※オンライン併用

3 出席者：

委員：小林座長、石山委員、今出委員、柿沼委員、齋藤委員、堀江委員、山本委員

文化庁：今泉審議官、塩川文化資源活用課長、横田専門官、門脇活用推進係長、若林文化財保存活用コーディネーター

4 概要

第1回懇談会の振り返りについての事務局説明に続いて、『ファンベース』（ちくま新書、2018）の著者である佐藤尚之氏よりファンベースの基本的な考え方について話題提供があった後、意見交換が行われた。概要は以下のとおり。

■質疑応答

- ・ ファンを4タイプに分類して捉えているとのことだったが、どのファン層を伸ばすべきと考えるか。（山本委員）
- ・ ファンは既にあるものであり、「ファンをつくる」「ファン化する」という発想ではない。よりコアなファンである「参加・共創期」を伸ばすことが望ましいが、文化資源の場合コアなファン層が少ないということであれば、その手前段階のファンに注力すればよい。ファンは多ければよいというわけではなく、5人でもいいから捕まえて、その5人から周りに波及させていくという考え方に立つべき。（佐藤氏）
- ・ 地域内においては、ボランティアガイドなどファンと捉えるべき人が十分に活躍できていない現状がある。（山本委員）
- ・ まずはそういった方たちを手厚くフォローし、文化資源のどこを愛しているのかなど、徹底的に聞きこむことが必要。同時に、ボランティアが本当にファンなのかという確認も必要。（佐藤氏）
- ・ 価値観が近いファンの方に熱意をもって文化資源の魅力を伝えてもらうために、地域側としてすべき準備は何だと考えるか。（石山委員）
- ・ ファンの愛を地域に伝えてもらうためのきっかけを用意する必要がある。その際、若者向けのネタを用意しようというような世代を区切った発想は必要ない。ファンは世代を超越する。（佐藤氏）
- ・ ファンが盛り上がりすぎて地域住民が置き去りにならないように、地域住民はどのように関与することが望ましいと考えるか。（石山委員）
- ・ ファンたちは“中の人”に会うことを非常に喜ぶ。メーカーの一社員であってもファンにとってはあこがれの人。文化資源に置き換えれば、文化財に携わって苦勞している方

等に会えるとよいだろう。(佐藤氏)

- ・ 自分たちの地域の文化資源の魅力に自信が持てず「この地域には何もない」と言うケースを多く見てきた。特に公務員に多いように思う。帯広市がファンミーティングを実施したのはどのようなきっかけか。また、ファンミーティングに消極的だった企業がファンミーティングを実施したきっかけは何か。(小林座長)
- ・ 帯広市役所の職員の方から相談を受けたことがきっかけ。帯広市役所の職員の方は、地域の魅力には気づいていたけれど自信がないという段階だった。企業は熱意のある一人の役員の方が決断され、実施した。(佐藤氏)

■意見交換

(小林座長)

- ・ 佐藤氏の話は納得する部分が多かった。これまで様々な地域の文化振興に係る計画策定に携わってきたが、その際にも、地域の中で文化資源の価値を分かっている人たちを中核にして、そこから取組を広げていくことが有効だと思っている。こうした取り組み方は、一般的な“モノ”商品の販売戦略とも共通する基本路線なのだと感じた。
- ・ 一方、「類は友を呼ぶ」の通りファンが次の顧客を開拓するという話だったが、文化資源の場合、単に拡大するばかりではないのでは、という疑問が残る。舞台芸術は供給量に限界があり、チケット争奪戦が起こることもしばしば。必要以上にファンを広げたくない、自分たちだけで独占したいという気持ちもあるのではないか。家族・友人ベースで共感の輪を広げていくという点については納得するが、バランスは難しい。また、本懇談会ではどこにターゲットを絞るべきかも検討が必要だろう。

(山本委員)

- ・ 富山県のおわら風の盆の取組事例を紹介する。行事運営委員会が主催者となっている祭りだが、資金不足が課題であり、継続的な応援の仕組みづくりを必要としている。そこで今年度、応援する気持ちを形にするためのツールとして、有料のうちわを制作した。売り上げは好調で、地域住民からも欲しいという声があった。
- ・ 外からの押し付けではなく地域主体で取り組んでいるが、地域の中で全てを完結させることは難しい。特にデザイン、販路開拓といった専門知識が必要な分野は、地域外の人力を借りて、徐々に自立を図ることが重要。また、こうした取組全体をディレクションしできる人材も必要。

(小林座長)

- ・ 行政が主導すると、デザインがいまいちであったり、公平性の観点から無料配布となってしまうが、住民主体の取組という点がよかったのだろう。

(齋藤委員)

- ・ ファンベースの考え方は、文化観光の基本設計に据えられるものだろう。今後、文化庁が文化観光について検討を深めていく際のフレームワークとしては、総論としては参考になる。今後、このフレームワークに具体的な事例を当てはめて、より解像度を上げていけるとよい。
- ・ 具体的な事例として、とあるモノづくりが盛んな地域が取り組んでいるオープンファクトリーの取組がある。観光客は、普段は見えない職人の細かな作業に触れられることで、製品に対する理解や愛着が深まる。職人は、自分が作った製品の使い手の顔が見えることで、仕事への意欲が高まる。単に高単価か否かではなく、リピート数や製品の購入などサービス内容を多角的に展開し、担い手の増加などに繋がる高付加価値化の事例と言えるだろう。こういうスキームを説明する際に、「ファンベース」といった考え方で整理するのは、戦略としてありだと思う。
- ・ 一方、ファンベースを基本に据えるべきと言うことは簡単だが、実践は難しい。単に高単価な観光商品を造成するのではなく、コミュニケーションデザインできる人材が必要となる。

(今出委員)

- ・ 新規層の開拓はあきらめるべきという話には驚いた。京都市は初来訪の観光客が多いと思うが、京都市の文化資源の場合はどのように考えておられるのか関心がある。
- ・ ファンの意向と地域の意向が乖離してしまわないかという点について、文化財の場合は所有者や地域住民がいる。所有者ありきであることに、注意が必要。
- ・ ファンもどこから連れてくるかが難しいと感じた。地域の人か、外からか。私も福井県のファンとしてどう動けるか考えていきたい。
- ・ 「類は友を呼ぶ」というワードが出ていたが、非常に近い文化資源同士をグルーピングして提示することで、コミュニティとして広がっていくのではないかと。

(柿沼委員)

- ・ その通りという感想を持った。この懇談会で考えるべき重要なことは、今回の話題提供を受けて、どのような方向性を提示するのかということ。あえてブレーキをかけると、ファンを見出し、そこからの波及効果を生み出すことだけにフォーカスしてしまうと、観光プロモーション事業と変わらないと思う。ファンを作るのは難しいこと。本当の意味での本質が薄れる危険性もあると思う。今回のファンベースの考え方を今後の検討の中でどのように活かすかは、きちんと理詰めを考えていくべき。

(小林座長)

- ・ 柿沼委員の指摘は全くその通り。

(堀江委員)

- ・ 冒頭で説明があった事務局資料に、「地域の人々は自分の地域の良さを知らないことが多い。一方で、外の人から教わればよいというものでもない」とあるが、佐藤氏の話は「ファンという外の人に教わるべき」というもので、前回までの事務局資料との流れを確認しておいた方が良いのではないか。

(事務局)

- ・ 資料中の「外の人」とは、地域の文化資源への愛がなく、理論的な正解を押し付けてくるような人と捉えている。一方で「ファン」は、地域の文化資源を愛し、地域の文化資源の活用について自分事として考えてくれるような人であり、「外の人」でも「中の人」でもない中間的な存在として捉えている。

(堀江委員)

- ・ その認識に違和感はない。「地域の人」と言ったときに、単に「居住者」という意味合いよりも、「対象を愛している人」という整理がよいか。
- ・ ファンは地域の外に多く存在し、日常的な習慣として文化を楽しんでいる人で、こうしたファンたちが本場である文化資源を訪れる、という構造ではないか。これまでの政策は着地側を意識したものが多いが、発地側にアプローチする政策が必要ではないか。具体的には、補助金事業の申請時などに、ファンの声を参考にしているかどうかを問うようなチェック項目を盛り込むなど。

(石山委員)

- ・ 「ファンをつくる」とは言わないという点は衝撃だった。最初からコアファンだけに絞り込むというのは、地域づくりでは難しい部分も出てきそう。地域の取組段階や文化資源のタイプに応じてファンベースの考え方が有効になるフェーズもある、ということではないか。ファンベースを参考にしつつ、地域ベースであるべきと思う。
- ・ 文化資源の魅力は、最初はよく分からなくても、成長や経験に応じて実感できるようになる部分も大きい。そういう芽を育てていくことは文化庁の重要な役割でもある。
- ・ ファンベースでは、文化財自体の価値は関係ないということだったが、国や地域側が文化財を通して次世代に伝えていくべき価値や伝えていきたい物語はあるので、ここでは、価値ベースとのバランスを考えることが重要なのだろう。
- ・ 外の人に評価してもらうことは重要なきっかけとなるが、地域内でもすでに外の目を持った人が結構活躍している。昨今、地域で中核になっている人材は、Uターン、Iターン等、外の世界を知ったうえで、その地域の良さを再発見した人たち。そのような人

材の考えをじっくり聴いたり、応援したりできるような仕組みがあるとよいのではないか。

(小林座長)

- ・ 同感。地域内に地域のことを真剣に考えている人材がいる。そうした人材を見つけ出すことは大変だと思うが、探すきっかけづくりに対してサポートできるとよいのでは。

(山本委員)

- ・ 佐藤氏の話はかなり抽象化したもの。総論は賛成だが、実践するとなると、地域の理解を得たり、ファンミーティングの参加者を見つけたり、ファンコミュニティを構築したり等、難しい部分は多いだろう。地域側にやる気があり地域主導でやるのならよいと思うが、万能薬ではない。
- ・ 具体的な事例を示すべき。国としてどう支援するかは難しいが、それを認めることは重要だと思う。ヒト、モノ、カネの全てが必要になる。新しい機関、外部の専門家などのリソースが必要だと思う。

(小林座長)

- ・ 文化資源の類型によって、ファンベースの考え方が合うタイプ・合わないタイプがあるか。お祭りは人が参加して成り立つものであり、ファンの存在は容易に想定できる。一方、仏像や建造物などになると、お祭りとは条件が異なるのではないか。ファンをつくる、ファンを見つけ出すというステップが最初に必要ではないか。

■今枝副大臣による締め括り

- ・ 人口減少・過疎化の進行により、日本各地の文化資源が容易に失われてしまうという危機感がある。交流人口・関係人口の拡大等、地方創生に向けた文化観光の推進は、文化庁の中でも特に重要な施策の一つと考えている。
- ・ 文化観光は多様なステークホルダーが関係する分野であり、その推進にあたっては行政だけではなく産官学の連携が不可欠となる。この懇談会は、まさに産官学それぞれの立場の有識者の皆様にご参画いただき、文化観光政策に関する実質的な検討を行っていく場として期待している。
- ・ 本日は主に、文化観光の推進を図る上での根幹となる、地域の人々が文化資源の価値をどのように発見・実感することが出来るか、という点について、佐藤氏が提唱されている「ファンベース」という考え方を参考に、意見交換をいただいた。近年、ファンを大切にしている企業や団体の成功事例はよく耳にするところであり、そうした考え方が今後、文化観光の分野にどのように適応できるのかについては、非常に興味を持っている。地元である三河の祭りでも、地域住民と地域外の人とが一緒になって祭りを盛り上

げようという動きがある。

- ・ 引き続き、様々な視点・様々な切り口から文化観光について議論を深め、より良い政策立案に繋げてもらいたい。

以上